

高校でも一緒に 定員内不合格を考える

写真は琉球新報 2 月 4 日「高校でも一緒に 定員内不合格を考える」連載の 1 回目。先に紹介した沖縄タイムスに続いて、琉球新報も障がいをもつ人の高校進学問題を取り上げる。沖縄二紙が競い合うように問題にせまる。ネットの投稿でざっと読んできたが、大阪市立中央図書館で記事をコピーしたので紹介したい。

記事の最後から一県立高校への進学を希望する重度知的障がいがある仲村伊織さん(17)と家族の活動は、ほとんどの中学生が高校進学し、社会では高校での学びが求められているにもかかわらず、成績が足りなければ空席があっても入学できない定員内不合格の問題をあぶり出した。「誰ひとり取り残さない」を理念に「質の高い教育をみんなに」を掲げる SDGs (持続可能な開発目標) にもつながる、共生社会に向けた高校のあり方を考える。



13 日には 1 面と社会面に、伊織さんの入試について伝えている。解説から一3 度目の高校入試に挑む仲村伊織さんを巡り、県教育委員会が合格の可能性に言及したことは、現行の入試制度で誰もが合格の可能性があると一般論を述べたにすぎない。しかし、これまで県教委は知的障がい者の受け入れを巡り「制度設計に時間がかかる」と述べるなど、本年度の不合格を示唆するような説明をしてきたため、一般論だとしても仲村さん本人や家族に与えた安心感は大きい。



県教委は「学びを保障できない」とする方針を撤回し、入学後は全ての生徒の学びを保障することを確約した。また、定員確保の努力を求める通知を各高校の校長宛に発出する予定で、受け入れを拒否する考え方の払拭は進む見込みだ。

当面の焦点は、必要な合理的配慮が入試でなされるか、試験結果を受けて志望校の校長がどのような基準で可否を判断するのかに移る。

高校入試に阻まれているのは仲村さんだけではない。中卒者、高校中退者などの生活は実態がつかみにくく、子どもの貧困解消が進む昨今においても、支援の空白と指摘される。

仲村さんの高校入試挑戦は、定員内不合格に表れる「適格者主義」の弊害も浮き彫りにしており、より深い議論が求められている。

(2020 年 2 月 24 日)